

はじめに

本テキストは、皆さんのが無理なく基本をマスターし、かつ応用力を養成できるように編集してあります。

単元ごとに、知識を定着させるための例題と「解法と学習の手引き」があり、さらに問題を解く力を確実にするために、演習問題Aと演習問題Bが段階を追って配列してあります。

古典は知識の積み重ねが不可欠な教科です。本テキストの学習を通じ、正解へのプロセスを体得し、実力を確かなものとされることを願っています。

構成と活用法

本テキストは、次のように構成されています。

▼例　題 各講で基本的な問題を出題しています。

▼解法と学習の手引き 例題の単語や語法についてヒントを示しています。

▼演習問題A 基礎力の再確認を目的としています。わからぬ問題がでたときに役立ててください。

▼演習問題B 応用力の養成を目的としています。例題・演習問題Aで学んだ文法・用語をどのように活用していくかを考えながら、問題に向かうと効果的です。

❖ もくじ——大学受験β 古典

1 説話

2 物語

3 隨筆・日記

4 近世

18

10

2

プラスα 助詞用法チェック

34

26

18

付録——文語文法要覧

36

第1講

説話

例題

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

大納言なりける人、小侍従と聞こえし歌よみにかよはれけり。

ある夜、物いひて、暁帰られけるに、女の家の門を遣り出だされけるが、きと見返りたりければ、この女、名残りを思ふかとおぼしくて、車寄せの簾に透きて、ひとり残りたりけるが、心にかかりおぼえてければ、供なりける藏人に、「いまだ入りやらで見送りたるが、ふり捨てがたきに、何とまれ、言ひて来」とのたまひければ、「ゆゆしき大事かな」と思へども、ほど経べき事ならねば、やがて走り入りぬ。車寄せの縁の際きは5
にかしこまりて、「申せと候」とは、さうなく言ひ出でたれど、何と言ふべき言の葉もおぼえぬに、をりしもゆふつけ鳥、声々に鳴き出でたりけるに、「あかぬ別れの」といひける事の、きと思ひ出でられければ、物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもなどかかなしかるらん

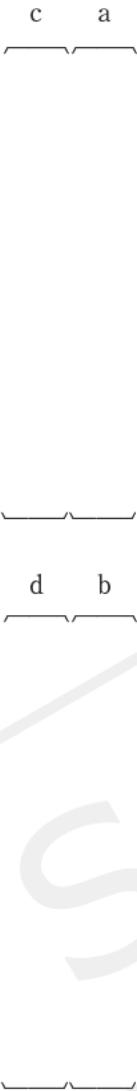
とばかり言ひかけて、やがて走りつきて、車の尻に乗りぬ。

家に帰りて、中門におりて後、「さても、何とか言ひたりつる」と問ひ給ひければ、「かくこそ」と申しければ、いみじくめでたがられけり。「さればこそ、使ひにははからひつれ」とて、感のあまりに、しる所などたびたりけるとなん。

この藏人は、内裏の六位など経て、「やさし藏人」と言はれる者なりけり。

この大納言も、後徳大寺左大臣の御事なり。

問一 傍線部a～dを現代語訳せよ。



問二 傍線部A「あかぬ別れの」は、「待つ宵にふけ行くかねの声きけばあかぬ別れの鳥はものかは」の和歌の一部である。この和歌（「待つ宵に……」）の作者は誰か。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 小侍従 イ 大納言 ウ 藏人 エ 作者（「今物語」）

問三 傍線部①・②の動作主（主語）は誰か。最も適切なものを次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア 大納言 イ 藏人 ウ 小侍従 エ 作者

①

②

ほどだ

出典

「今物語」

鎌倉時代中期の一三九〇年頃の成立。ジャンルは世俗説話集で編者は藤原信実と言われる。平安から鎌倉初期の短編説話五十三編を収める。

重要古語

◇大納言なりける人＝後徳大寺左大臣藤原実定。

◇きと＝ふと。

◇とまれ＝「ともあれ」のつまつた形。

◇物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもなどかかなしかるらん＝「（恋しい人が帰つてゆく別れの朝を告げる鳥の声は）物の数ではない」とあなたが言つたとかいう鳥の声が、今朝はどうして悲しく聞こえるのだろうか

◇しる＝治める・領有する。
◇やさし藏人＝優美な藏人。

◇待つ宵にふけ行くかねの声きけばあかぬ別れの鳥はものかは＝恋しい人の来るのを待つている夜に（その人は来ず）夜がふけたのを告げる鐘の声を聞くつらさは、話もしつくさないで別れる朝に（夜明けを告げる）鳥の声を聞くつらさも物の数ではないほどだ

問四 本文の内容として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 小侍従は、大納言との別れがつらく、人目もはばからず軒先まで出て見送つてしまふほど情熱的な人であった。

イ 藏人の和歌は、大納言の心の中を代弁し、大納言と小侍従の仲をより強く結びつけるものであった。

ウ 大納言と藏人との信頼関係は、常に行動を共にして相愛の小侍従への思いを藏人に代弁させるほど深いものであった。

解法と学習の手引き

太字部分の語句や語法の解説をヒントに例題の問題を考えてみよう。

大納言断定 過去なり過去ける人契りを交わして、小侍従と聞こえ尊敬 過去し歌よみにかよはれ尊敬 過去けり。

ある夜、物いひて、過去暁帰尊敬 過去られけるに、女の家の門を遣り出尊敬 過去だされけるが、きと見返りたり尊敬 過去ければ、この女、名残りを思ふかとおぼしくて、車寄せの簾に透きて、ひとり残りたり尊敬 過去けるが、心にかかりおぼえて尊敬 過去ければ、供なり過去ける藏人に、「まだ入りやらで見送りたるが、ふり捨てがたきに、何とまれ、言ひて來」とのたまひければ、「ゆゆしき大事かな」丁寧と思へども、ほど経べき事ならねば、やがて走り入りぬ。当然車寄せの縁の際にかしこまりて、「申せと候」丁寧とは、さうなく言ひ出でたれど、何と言ふべき言の葉もおぼえぬに、をりし控えて申し上げるのことです 完了ためらわずに過去、Aもゆふつけ鳥、声々に鳴き出でたり完了けるに、「あかぬ別れの」といひける事の、きと思ひ出で打消 自発 過去られければ、ふと思ひ出されたので物かはと君が言ひけん鳥の音の今朝しもなどかかなしかるらん(恋しい人が帰つてゆく別れの朝を告げる鳥の声は)物の数ではないとあなたが言つたとかいう鳥の声が、今朝はどうして悲しく聞こえるのだろうかとばかり言ひかけて、やがて走りつきて、車の尻に乗りぬ。だけ言いかけてすぐに(大納言の牛車に走りついて家に帰りて、中門におりて後、「さても、何とか言ひたりつる」と問ひ給ひければ、「かくこそ」と申しければ、いみじくめたがられけり。c「さればこそ、使ひにははからひつれ」とて、感のあまりに、しる所などたびたりけるとなん。

この藏人は、内裏の六位など経て、「やさし藏人」と言はれける者なりけり。受身 過去
この大納言も、後徳大寺左大臣の御事なり。断定 過去

問一 aは「ゆゆしき」の語義がポイント。

bの「ね」は打消の助動詞。cの「れ」は尊敬の助動詞。dの「たび」は「給ひ」と同義。

- 問二 藏人が思い出したのは誰の歌か。「ものかは」は物の数ではないという意味。
- 問三 大納言が女の家から出て行く場面である。

問四 藏人の機知がポイント。

演

習

題

A

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

天徳の御歌合の時、兼盛・忠見、ともに御隨身にて、左右に番ひてけり。初恋といふ題を賜はりて、忠見、名歌よみ出でたりと思ひて、兼盛もいかでこれほどの歌よむべきとぞ思ひける。
恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか

さて、すでに御前にて講じて、判ぜられけるに、兼盛が歌に、

つづめども色に出でにけり我が恋はものや思ふと人の問ふまで

ともに名歌なりければ、判者、判じかねて、暫く天氣をうかがひけるに、御門、忠見が歌をば、両三辺御詠ありけり。兼盛が歌をば、多辺御詠ありける時、「天氣左にあり」とて、兼盛勝ちにけり。

忠見、心憂く覚えて、胸ふさがりて、それより不食の病付きて、憑みなき由聞こえて、兼盛訪ひければ、「別の病にあらず。御歌合の時、名歌よみ出だして覚え侍りしに、殿の、『ものや思ふと人の問ふまで』に、あはやと思ひて、あさましく覚えしより、胸ふさがりて、かく重り侍り」とて、つひに身まかりにけり。執10
心こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えて、あはれなり。ともに名歌にて、「拾遺」に入れられて侍るにや。

沙石集

鎌倉時代の一二二三年成立。仏教説話集で編者は無住法師。無住のその他の作品には「雑談集」がある。説話を種として仏教の尊い教理を教えようという意図がみられる。

重要古語

◇番ひてけり॥組み合わされた。

◇てふ॥という。

◇判じかねて॥決めかねて。

◇天氣॥帝のご意向。

◇別の病॥特別な病気。

問一 傍線部 a ～ g を現代語訳せよ。

g e c a

f d b

問二 傍線部 A 「かく」はどんな内容を指しているか。最も適切なものを次のア～クの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 憲みなき イ 初恋 ウ 名歌 エ あさましく

オ 御詠 カ 不食の病 キ 別の病 ク 御歌合

問三 本文中の和歌二首には共通する修辞法が見られる。最も適切なものを次のア～クの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 枕詞 イ 掛詞 ウ 縁語 エ 序詞
オ 句切れ カ 折句 キ 体言止め ク 本歌取り

〔〕

〔〕

〔〕

〔〕

問四 傍線部 B 「執心こそよしなけれども、道を執する習ひ、げにも覚えて、あはれなり」は編者の感想である。この感想に合うものはどれか。適切なものを次のア～クの中から二つ選び、記号で答えよ。

ア 「初恋」という題で歌合の歌を競うのは無理もないことで優雅であること。

イ 忠見の歌を天皇が二、三度詠まれたのに、兼盛の歌の方が優れていると誤解されたこと。

ウ 何ごとに對しても真剣勝負で臨まなければならないという教訓を示したいこと。

エ 兼盛が心配して忠見のもとを訪問したのは見上げたことだと感心していること。

オ 両方とも名歌であったが、すでに御前で講じられたからしかたがないとあわれむこと。

カ 歌合で名歌を詠み出すことの難しさと勝負の厳しさを痛感していること。
キ 忠見に対し、歌合の結果で病氣になると愚かなことだと批判していること。
ク 和歌の道に熱心に取り組む態度は立派だと賞賛し感嘆していること。

問一 単語・文法のみでなく、前後の意味でしつかり確認すること。

問二 忠見が自分の状態を指している。

問三 いずれも倒置となつていて、

「執心こそよしなけれども」と「道を執する習ひ、げにも覚えて、あはれなり」のそれに分けて考える。

□ 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

昔、清水の橋の下に、薦にてあやしの家居せる者の、昼は市に出でて、さかまたぶりといふものを立てて、物を乞ひて世を渡るありけり。腰には薦のきれを巻きてぞありける。

かかるほどに、時の大臣なる人、いみじく心を致して仏事する事ありけり。導師は、□A□にとりて尊く聞こゆる人にてぞおはしける。このさかまたぶりの僧、庭にたたずみて、事の刻限をいみじくうかがひたり

げに侍りければ、「さやうの乞食は、かやうの所には見え来る事なればにこそ」など、人々は思ひけるほどに、すでに事よくなりて侍りけるに、この僧、日ごろの姿にて、日隠しの間より歩み入りて、高座に昇りにけり。

「あれはいかに」と、「目もはつかなるわざかな」と、あやしみ合ひたりけれど、「やうこそはありらむ」とて、法要などして始まりにけり。

さて、説法いひ知らずいみじく、「昔の富樓那尊者、形を隠して來たり給へるか」などいひあつかふほどに侍りけり。⁽³⁾ 我もさめざめと泣きけり。この導師すべかりつる人も、雨しづくと泣きけり。御簾の中、庭のほどなどは所せきほどにぞ侍りける。さて、涙おしのごひて、高座より下り給ひければ、このあるじも、対面せむと思ひ、人々も、⁽⁴⁾ そのよし思ひけるほどに、下りはてければ、やがて例のさかまたぶり立てて、狂ひ出でて紛れにけり。その後は、「あしき事しつ」とや思ひ給ひけん、かきくらし失せにけりとなん。「いかにも、ただ人にはあらざりけり」とぞ、人々もいひ合ひたりける。げに、ただにはあらざりける人にこそ侍りけれ。たどりけめども、心中はいかばかり諸法空寂の理に住しておはしけんと、尊く侍り。

「閑居友」

鎌倉時代の一一二二二年頃の成立。仏教説話集。編者は慶政といわれる。往生伝の流れをくみながら時代的な注目をあげた遁世者や聖に焦点をあてた求道的な傾向は、同時代の「発心集」にも見られるものである。

重要古語

◇あやしの=粗末な。

◇いみじく=いたいそう心を尽くして。

◇所せきほど=いっぱいになるほど。

◇理=仏法の道理。

「出典」

(注) ○さかまたぶり=逆Y字形をした杖。 ○日隠しの間=寝殿の正面階段を上った所の奥。

○富樓那尊者=釈迦十大弟子の一人。雄弁で説法に優れていた。

○「摩訶止観」=仏書の名。

問一 **A**に入る最も適切な語を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 時 イ 心 ウ 仏 エ 例 オ 理

問一 **A**にとりては「その当時」の意味になるようす。

問二 傍線部①・④の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

① ア よく理解のできない行動だなあ イ 目にも止まらない早業だなあ
ウ 見るからに恥ずかしい様子だなあ エ はつとさせられるほど見苦しい法事だなあ

④ ア 説法が巧みであったと感心しているうちに
イ 蔑んでいたことの言い訳を思案しているうちに
ウ 高潔な人柄にあやかりたいと思つてているうちに

エ 対面しようと考へているうちに

イ 蔑んでいたことの言い訳を思案しているうちに

ウ 高潔な人柄にあやかりたいと思つてているうちに

エ 対面しようと考へているうちに

イ 蔑んでいたことの言い訳を思案しているうちに

ウ 高潔な人柄にあやかりたいと思つてているうちに

エ 対面しようと考へているうちに

問三 傍線部②には活用の誤りが二か所ある。誤りを正したものを見せよ。

ア 時の大丈なる人 イ この文の筆者 ウ さかまたぶりの僧 エ 富楼那尊者 オ 人々

問四 傍線部③は誰のことか。最も適切なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 時の大丈なる人 イ この文の筆者 ウ さかまたぶりの僧 エ 富楼那尊者 オ 人々

問五 **B**に入る表現として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア ア これをはかり思ふに、食は少なけれども汗は多し
イ 袖を抑へ涙を流してあらばやと、嘆けども甲斐なくて、年も重なりぬるぞかし
ウ 何わざにつけても、ひとり侍るばかり澄みたる事はなし
エ 德を隠さんと思はば、そらもの狂ひをすべし
オ あるにもあらぬ身のゆゑに、いたづらに積りける罪こそ悔しけれ

問六 本文の内容と合致するものを、次のア～エの中から全て選び、記号で答えよ。合致するものが一つもない場合はオと答えよ。

ア さかまたぶりの僧は、自らが富楼那尊者の生まれ変わりだと言つて、人々を欺いた。
イ さかまたぶりの僧は正氣を失つていたが、この日の行為を反省して自らの命を絶つた。
ウ さかまたぶりの僧を正気に戻すため、時の大臣である人が仏事を営んだ。
エ さかまたぶりの僧は、日常生活からは考えられないような家を、橋の下に造つていた。

ヒント

問一 **A**にとりては「その当時」の意味になるようす。

問二 ①は形容動詞「はつかなり」の意味を確認する。④の「その」は直前の語句を指す。

問三 「らむ」は終止形接続だが、ここでは「あり」に付いていることに注意する。

問四 「我」は「自身」とこの場合は訳す。

問五 後文の「外面の行動は穏やかでなく見

せていたようだが、心の中はどれほど『万物は空しい』という道理（の中）にいらっしゃつたであろう」という内容を参考にす

る。

問六 本文の当該箇所としつかり照らし合わ

せる。

② 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

今は昔、西の京に住む人ありけり。品いやしからぬ人なり。一人の女子あり。その女子形貌端正にして心性柔和なり。しかば、父母これを愛してかしづく事かぎりなし。その家広くして、遣水などをかしくて、春秋の花紅葉など面白し。しかる間、父母この女子を愛して過ぐるに、女子花にめで、紅葉を興するよりほかの事なし。

その中にもいかに思えけるにかありけむ、ただ紅梅に心を染めて、これを観びけり。東の台の前近く紅梅⁵を植ゑて、花の時には、早旦に格子を上げて、ただ独りこれを見つつ、ほかの心なくこれを愛しけり。夜に至るまで媚しき匂をめでて、内に入る事をせず。花散る時に成りぬれば、木の下に落ちたる花を拾ひ集めて、塗りたる物の蓋^{ふた}に入れて、程過ぐるまで匂を愛す。

かかる間、この女子なにともなく悩ましげにて、わざとにはなけれども、日ごろわづらひけり。日数積りて病ひ重く成りぬれば、父母これをかぎりなく歎くと云へども、はかなくして失せにけり。父母かぎりなく泣き悲しみて惜しむと云へども、事限りあれば、葬送して後、人々別れにけり。その後、この紅梅の木の下を見るにつけても、惜しみ悲しむ事かぎりなし。

かかる間、この木の下に小さき蛇の一尺ばかりなるあり。「ただある蛇なめり」と人思ふ程に、明くる年の春、この木の下に去年の蛇出で来たりぬ。木を纏^Aきて去らずして、花咲きて散る時に、蛇、口を以て花を食ひ集めて一所に置きけるを、父母見て、「この蛇は早う昔の人の成りたるにこそありけれ。あはれに悲しき事かな」と思へども、「姿替りてあるが疎き事」と歎き悲しみて、清範、嚴久など云ふやむごとなき智者どもを請じて、この木の下にして法華經^Bを講じて、八講を行ひけり。しかるに、この蛇木の下を去らずして、初めの日より講を聞く。五巻の日、清範その講師として、童女が成仏の由を説きけるに、まことに聞く人も涙を流して、「あはれなり」と聞きけるに、その蛇木の下にありて、その座にして死にけり。父母より

「今昔物語集」
出典

平安時代後期の十二世紀初め頃の成立。編者は源隆国^{たかくに}というが不明。日本で最大の説話集といえる。天竺^{てんじく}（インド）・震旦^{しんたん}（中国）・本朝（日本）の三部三十一巻で約千余話からなる。仏教説話が中心であるが、本朝の部には世俗説話も収められている。

重要古語



◇品いやしからぬ人＝身分は低くない人。

◇かしづく＝大切に育てる。

◇なにともなく悩ましげにて＝何とはなしに苦しそうで。

◇わざとにはなけれども＝ことさらに（ひどい）ということはなかつたが。

◇疎き事＝（本心から）親しめないことだ。
◇やむごとなき智者ども＝立派な僧侶たち。

はじめて諸々の人のこれを見て、涙を流して哀ぶ事かぎりなし。

その後、父の夢に、ありし女子極めて穢々汚れたる衣を着て、心に思ひ歎きたるけしきにてある程に、貴き僧來たりてその衣を脱がしめたれば、膚は金の色にして透き通れるに、微妙の衣及び袈裟を着しめて、僧自ら女を引き立てて、紫の雲に乗せて去りぬ、と見て夢覚めぬ。まことにこれ偏に法華の力なり。

(注) ○形貌端正…容姿端麗(整つていて美しい)。

○東の台…寢殿造りで、寢殿の東側の別棟。東の対。

○早旦…早朝。

○八講…法華八講の略。法華經八卷を、四日に分けて、毎日朝座、夕座の二回におのおの一巻を修する。第三日目は特に「五巻の日」と称し、法華經第五巻「第十二」を講じる。提婆達多品には、童女が男に変身して、成仏したという話があり、當時女人成仏の証として女性に尊重された。

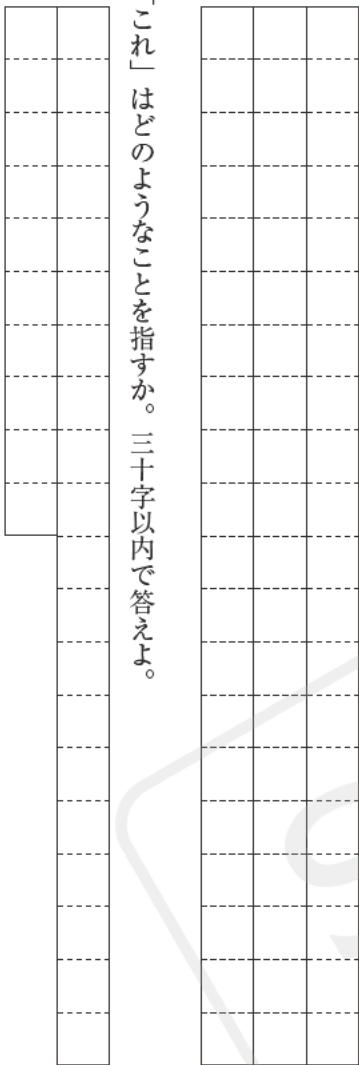
○微妙の衣…美しく立派な衣。

○紫の雲…如来が諸菩薩を従えて、臨終の際に人を極楽淨土に迎え導くために乗つてくる紫色の雲。

問一 波線部a～cを現代語訳せよ。

a
b
c

問二 父母が傍線部A「この蛇は早う昔の人の成りたるにこそありけれ」と思ったのはなぜか。六十字以内で説明せよ。



問三 傍線部B「これ」はどのようなことを指すか。三十字内で答えよ。

問一 a 「失せ」を明確に訳す。b 「なめり」は「なんめりとなるめり」。c 「あはれなり」は多義語なので文脈に沿って訳す。

問二 娘と蛇の共通点を指摘する。

問三 夢の内容は何を表しているか。